

「国際シンポジウム フレームの超域文化学—フレームとしての古典 III」参加報告

(2018年3月26日 日本台湾交流協会 台北)

フランク・フェルテンズ

フリーア美術館

2018年3月26日、台北にある日本台湾交流協会で開催された。この発表は「フリーア美術館所蔵の雲谷等益筆『瀟湘八景図屏風』について」というタイトルで、フリーア美術館所蔵の雲谷等益筆『瀟湘八景図屏風』を例に、未だにあまり研究されていない保存修復法を検討した。それは、もともと水墨画として描かれた絵画に金泥を付ける技法である。傷を隠すこと、あるいは修飾する目的で、水墨画に金泥を施すという慣行は、極めて近世的なものであると言ってよい。金を墨絵に加えた結果、もともとモノクロで作られた作品の根本的な美意識が変化してしまう。つまり、モノクロのものがモノクロではなくなるということだ。中世の水墨美意識を基に描かれた作品は、近世に盛んに行われた金泥の付加により、近世的な美意識へと変容した。その結果、画家の作意と後世の美意識との間に摩擦が生み出された。



発表中の様子

台湾では多くの国の大使館の代わりに、文化や経済協力の施設があるため、日本台湾交流協会も日本大使館のような役割を果たしているため、日本台湾交流協会の学会で発表することは非常に光栄だった。学習院大学の佐野みどり教授が企画した学会だったため、学習院の研究生時代の友達も多く再会できた、とても貴重な機会だった。台湾人の先生や学生も参加し、国際的なイベントだったと言える。学会後は佐野先生と一緒に、発表者の皆さんと美味しい台湾料理をいただいた。



発表後の懇親会



ラクーンの梁蘊嫻さんと渥美財団の
本多康子さんとともに